唐土奇談

チ 13
1641

文那劇談

壹

チ多13
1641
1-3

唐土奇談

壹

文耶劇談

チ多13
1.641
1-3

唐土奇談

京都帝國大學圖書

ヲ チ 13
1641
(1-3)

唐土奇譚序

唐有煬帝百花谿宋有偷酒
杜丹香金有西廂記元有琵
琶記明有汴京十樣錦清有
千字文西湖柳皆是勾欄等
一風流也本邦ニモ多有盛衰記
千本櫻陳分手綱忠臣藏近江

京都帝國大學圖書

ヲ 13
1641
(1-3)

唐土奇譚序

唐有煬帝百花谿宋有偷酒
杜丹香金有西廂記元有琵
琶記明有汴京十樣錦清有
千字文西湖柳皆是勾欄等
一風流也本邦ニモ多有盛衰記
千本櫻陳分手綱忠臣藏近江

原氏鎌倉山是ハ句欄ノ一大佳
境奚其屑于唐乎或曰日本ノ句
欄者以色與愁為本唐ノ句欄者
主忠信加以色故曲ニ有味ヒ予曰
唐人而見之應有味日本人而
見之不啻無味其ノ文句陳舊
翰不可得解至其生淨旦丑

寺之類是何言歟問宿老而
不知尋檀那寺而不解字引節
用ハ無所考伊勢濱荻雞波蘆
京都惣嫁江戸袍鷹易地者
皆不然予雖不詳其譯而偶有
幽閑處因細寫其情味示之吾友
舍樂齋舍樂齋乃解其情味終

以浮瑠璃文句綴之其間究め鉄炮雖唐様不讀為貴和文以不聞為妙唯是獨呑込而不通世間謂之已惚嗚呼舍樂齋舍樂齋實粹親玉者也

太平館主人題

唐土奇談巻之一

抑元の勾欄なるものは本邦の芝居と大いに異なる事なり元始漢魏六朝の樂府と称して伶人の皆詩を謠ひて歌ひ来りて日本にくだりて白拍子の謡ひかどを合して歌とはじめの小唄芝居はじめとなる所の玄宗皇帝はじめ傳奇院本とて芝居狂言のもとゐとなるとぞいはるる盛に行はるる宗は微宗皇帝のとき興國乃人宋多せり小名義器に粉紅と施しる衣かを被せ優人に命じて其向に擬して歌せて内是を五花爨弄の名と称して其時に行はるる是を芝居狂言のもとゐ

しはすり氏るに一種の 勾欄減子 といふ者出来多くと國忘
漢楚の戰かけ言にたくみてたゝ世に行る其後金乃章宗
皇帝のはけ董解元が西廂記といふる狂言を作る是唐の元稹
が會真記小擬して作出る狂言小説今芝居狂言の規範
とし本邦にて菅原伝授手習鑑や假名手本忠臣蔵と
掛換とするが如くまた後世西廂記のくさぶて作る狂言
多し唐朝より後代はるゝ狂言多くとしてあはせ
たに記し

唐の世ふはやりしへ

○演記長恨歌　○列女降黄龍

○女状元春桃記　○粉墻梨花院
○晉宣成道記　○楊帝白苍鈴

宋の世ふるやしへ

○三國一夜談　○王子端捲簾記
○倫酒杜丹香　○三藏法師不抽廟
○名敲千字文　○四坐乙

金の世ふはるやしへ

○西廂記　○講家求記
○水酒梅苍驥

元の世ふるやしへ

○琵琶記　○水滸千字文
○蘇武和番曲
明の世ふはやりしゝ
○截紅閑浴堂記　○長慶春夢談
○汴京十様錦　○范増霸王曲
○楊大真戀鰲山　○賞苔燈
そゝ外あげて牧〻べ〻に又今の清明にもてはやりし粽も
又ちゝに内ふ康熙三十六年のまゝ小京百花坊に芝居ふく
千字文西湖の柳とゝ外題ゝく芝居ひらせ成
清明節一のたゝり粽をゝ僧ゝさく寺院布禪文ゝて実ふ

本朝の芝居ふわゝも異うゝぐるゝを記し役者おなじ芝居
家の前漢名妻ゝ左兵衛ふ海内の好ものにまゝ志むる者ゝ
○芝居ふゝ芝居ふゝ分

演場　戯場　劇場

拘欄　戯臺

宮芝居ふゝ小芝居分　小勾欄　ふゝ本邦ふて
芝居のゝ分

戯棚　塊儡棚　ふゝ○舞

鬼門口ふゝ桟敷を　戯房　ふゝ楽屋の入口分

棚　ふゝ桟敷ふゝ宮人ふゝの坐を桟敷
ふゝ欄干分青ふゝ漆ふゝ塗ふゝ絵ふゝの彫もの有足分

青龍頭　ふゝ鶴ゝの丸おすする桟敷れまゝ之外　火棚
ふゝ仕桟敷のゝ

○粽をゝふゝ分　引戯

演戯　戯齣　雜劇　戯文　ともいへり

ものを　今　といへり　又　科　ともいへり

○新たなる　豔段　といへり　二の舞を　二豔段　といへり　仕組を

花穿　といへり　大抵そのはじめ　初日のおれ　夜ふかする

こと　又役者のものまね　口技　といへり　○芝居布　といへり

院本　ともいへり　戯段　ともいへり　○一段　一ざん　といへり　二齣　二齣

といへり　○歌うたひ　今　といへり　幕　といへり　諸科　といへり

○やくしゃ　といへり　戯子　ともいへり　梨園子弟　ともいへり　勇ましき

芝居者　俳優家　と称すれども　外役しゃの品目

圖　とりふたに記す

唐の立役れ像

立役　生　といへり　なほ　名人

名人　今の清れ世ふて

劉子卿　といへり

光一の名人とす

しん実悪　ふる

本邦の義経の

本九郎の可雑助　ふるの

実悪　ぬると　両術　といへり　又　楊雲伍

いへり　名人　いさぎたよく　中村吉右衛

尾上菊五郎　ふるの

唐の女形の像

女形の[旦]とは、若女形の[貴妃][美女]とは、花車ごと[老旦]とは、小役の[小旦]とは、仙人の女形、今の清朝の武姿子などとは、女形の本邦の中村富十郎などは、小さく、[illegible]

唐の敵役の像

敵役の[浄]とは、又[悪脚]とも、清朝にて顧えんと、いつも、立役、[illegible]本邦の中村歌右衛門、又、王達四郎といふ、上手なり

足、はやく、立役、[illegible]と、清尾、[illegible]十郎のごとく、[illegible]、又、ちゑつ方、張胡四郎、[illegible]の類、[illegible]

唐のやゝし敢け像

やゝしは 浪子 とゝ清の王真琥李娥郎あり一の名人にて
又立役とゝうゝとゝ小川右左衛門に肩こゝろのごひうゝん恵ゝて
庫ゝゝも役者ゝゝ名人に

ゝゝゝゝゝゝ老人あり
故に清の朱仲佗ゝゝの芝居ゝゝゝゝゝゝ
龍撞莫怪樽前客 弟子梨園皆白頭と俗れゝゝ
家ゝゝゝ衫掃と白髪あゝ俗小説ゝゝゝゝゝゝ
芝居役者でゝゝ名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

唐の乃外敢け像

乃外ゝ 王ノ渾 とゝ清の王金老とゝ乃外五十
余家ゝゝゝゝ壹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
本邦の代松百ゝのごひ
ゝゝん恵ゝて庫ゝゝ
芝居役者の外
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
歴ゝゝ役者小交り
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

唐の寒悪れ像

寒悪が 西脇

といへ
し役を

あらぶるいのり
をなすがよびいろ〳〵の
魔法をつゝ我身を
ひく〳〵ぶるして我邦のおたん
堂義かゝのさゞひうり

唐の芝居一枚看板の圖

千寿西湖柳

清れ朱彝尊先生西湖の柿の樹を詠ずる詩二首

四照亭開桂樹叢夜涼風細蟬燈紅人間又有霓裳曲絶倒吳趨老樂工

三徑秋深裏露新重尋酒伴過城闉只應夜夜西江月留照荻花舊釣人

雜劇

作者

湖上笠翁先生肖與

西泠柳亭宮

跌笠翁先生肖像

芒鞋竹杖見天子龍艦春
湖賜御巵一曲懐仙人不
解李白堆有汝鷗知

祇園張新炳

李笠翁先生は清の康熙年中の人にして湖上に住り伊園老人と号し元来家富と仕官を好まず天性手文人の物と文章一家の見なる書とよくし画とよくし音律結奇に通ずるのみならず康熙皇帝これを召して官位に接んとの詔あれども辞して受ず老に及んで宋勝ある時は詞曲伝奇を作り千字文西湖の柳丈先生の作と伝へ唐の世とくに高宗天元徴之みな院本の作あり宋の世とくに東坡先生秦少遊の作文あり元の世は孔仲施耐庵元丈の上なるべし本邦の近松門左衛門とも云べし明の世にもくに李卓吾祝允明

唐伯虎王世懋金聖歎鍾伯敬などの諸賢く皆戲文の俤ふユまありと

千字文西湖柳戲伶扮名目次

○劍士英　生　楊雲伍
○端王趙越　淨　顧元山
○蔡京　淨　張大兒
○蔡攸　二扮　張大兒
○童貫　淨　李之之
○術士徐達　淨　王達兒
○徽宗皇帝　浪子　王真琬

○宿大尉　生　劉秀卿
○宿之凱　浪子生　李娥郎
○行首李師々　旦　武娘子
○劍鶯々　二扮　武娘子
○張君端　二扮　王真琬
○李安達　二扮　劉秀卿
○林忠雄　生　劉士卿
○高俅　淨　張胡兒
○楊戩　淨　夏逸
○本客周六　扮諢　王金老

○了嫁標梅

小旦　王紅蓮

右ハ赤國乃芝居の番付役者名乃次第
ありけ芝居ハ世方ようくいろく新向しく
ゆんしゆ根ゞ唐のようしゆ行ゑのとり組ハと
ゆゝ解しゆゞく詞も堅ゞまりとるゆゝとく芝
居のゆゝとゝ思ひしぞとしにとるく主新向移
し取ゝく今ゝ赤ほの芝居ハ引ゆし世に清掃
墻ゞの山くし漬やゝくゆゝへやをゝを新とし
く千里柳庵偃月刀と行ゑゞ取組むゝ

らぞゝも我ゝゝかゝゝゝゝ懇く唐の新向ふゝゝ
ゆゝ只ゝ詞ゝ和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ赤ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

唐土奇談卷之一

移動
1.641
2

千里柳塘偃月刀

試問池臺主
當爲將相官
承恩不在貌
敎妾若爲容

13 チ

唐土奇談巻之三

千里柳塘偃月刀

第一 鞠

閩士英傾公廣千公橋を
水濶く時に自嘲し今年民亂の國公濶
琴を彈ぜしかば大法を
大宋第八代徽宗皇帝の御宇杭州の
白石津に一艘の船公廣千
て人者太守閩士英の屬下小者り課しく名
て曰者城に收う年貢米数百石海上うく経

唐土奇談卷之二

千里柳塘偃月刀楔子

第一齣

閔士英舶公廣干が擒を
水濱の時い魚喝し今奇き時い民亂れ國が治るを
琴と弦がれし大法忽うしび小法絶しかわさるを
大宋第八代徽宗皇帝の御宇うとき杭州乃
白石津に一艘の米舡ふ有し舶公廣干と
いへ者太守閔士英の廳下小吏の慄しく告
て曰者城に收る年貢米数百石海上うく經

試問神童子
當爲將相官
千里柳塘偃月刀
承恩不在貌
故事名爲容

風に乗じて海中へ投捨て漕く舟と命を全し
く當所まで着ぬ　こゝにごゝりまた貢米の米ぐ
ごゝりはなはだしくして沛義司へよろしくいい通達
下されこの死骸を漕小浸つて紙幣が
裏へ白ゆに跨まる小官々小弦撿しうち祝ひ
夫と知がゝ漕にあひしかはあるはその名太ち人
云上をべし夫にもゝ居とて捨一向小入にける
中背く太ち関士英こびく廊に立出ひ倩が
取者二三倩切かどもせはとる米が吟味しく十二
船乙海上逆風に乗吟苦労しゝであろ平速その数

常楽へ中をいすべられしも今おしんがはの米も
ありとくと吟味がなべしその方俵小脇右
が中付べし夫ゝ体長いてにべしと賞仁
乃取扱ひに唯ゝいくと立出るすとちがゝく
門皮を来り中よりに胡蒲村の百姓女
死骸が戸板よ祭れおまぐ持ゝ行ぐん
みを死ゝたよしゝ中まいで取牛ませう十々
うれへ無せしのはとまらせどわくと入来が
百姓ゝ死骸がうたすんぐがつゝんゝくしも
十胡蒲村の漁人今郷のぐく小糸にはり神

ゆへ漕ぶし細をかろしとし細矣を取をいぐしに
死骸を遠き村中なる吟味いてしゃしこれど
誰も見知りのない女を孫しく沙吟味くど
さるべしと夢分そろくく云上を賢士英白沼
に下を立ち〳〵死骸を捜し〳〵十二百姓ども
此女いまだ息を絶さしこれ身體冷へ脉もされ
ぬれども見んに全く絶ざるゆえ有いまだ年も
十六七を血氣盛の時なれば藤治の屋ろわるのよも
あるはず素知りなく猛さ女ん死骸いそ乃まく
見届くゆるべしと仰ると百姓ども扨も

杭州の大守賢士英へ
関羽の末孫〳〵代〳〵
忠義武勇の人と
なれば紀氏廣千が
問ふりの仰一分
恭し吟味をる

はるばるおもむくとみるのくおつてとゝりけはやア
ゆゝしうあるこの死骸奥へ出ぬ十二郭欽今日は大師
蔡京招請の日なれば客人ども早朝とはあり
さてく役人ふゝ接世用をおゐでさんそく
客彼へ案内をべし勅使ようくらいみけとども
勅廷昵勅の大師はれるうれば礼のようたゆう
んが付諸の右切に勅むべし必おこらうの
かうれと孫ようかうに客敬し客分あがもるこ出
のたんぶしを起に死れうり郭欽妻細長ようさ
秋君孫ようん先に入あゝれまゆう小ぶりくゝ下官

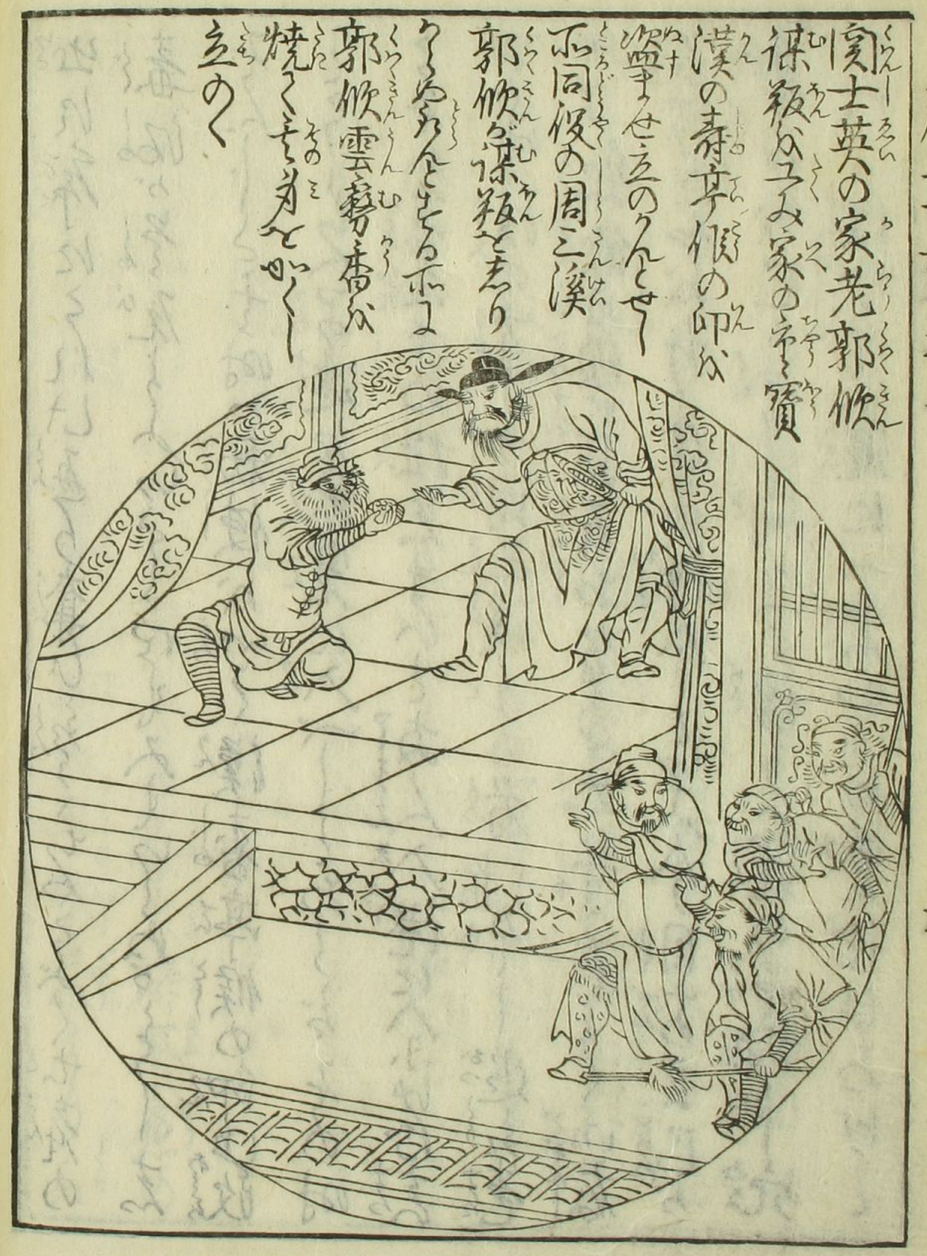
をゆ客おゆ付ようて客館よりの出乃ちゝ門
座の掃除を出来さへ仏の毎り客館より出つ
庭ようぐさ門ようと乃俄り者所に去例十ケ本
のり水柳者蛇のようくが鳥茅ぐ掃とれ
にうぐけ紅のちうもこざりようをいホウおを乃
柳者蛇ぐ宮ひ出しようさん郎ぶつおくうり
くしうを女の死骸ようおくようりようこその様
し香名ぐ蔵くござりようこと見出に郭欽
ようにうり開れ見ればこいうふ見こそ日本ふ
よ深れもうた神源として名香家ふうくも

上古黄帝蚩尤と戦ひたゝかひし時蚩尤すけ
軍のはゝ常にこの雲霧香ゆ一炬〻〻を怨ち
天地ゆ震動せしかの方晴〻と霧おちひゆ
方ゆ和れしとゆ夫ひゝなひしゆ毎度うり
ゆれば黄帝巧ぎ指南車ゆ作りゝなひゝく
方角ゆ指當く遥拠ちて極に蚩尤ゆ伐
めゝその時ゆ香蚩尤ゆ〻〻燎火乃中へ
投ゝみ焼尽せしより山方我国に伝ゝ
日本國ゝ尼ゆ神祭の香と名付く有ゝ
唐土ゆ漢の武帝の世に遠魂香を日本

へ送り交易せんと請めゝ使ゆ乃名
のみ唐土及びしに今日ゆ及びとゝに入ゝ夫の
興ゝ名香の法ゆ伝ゝ猪虎ゆ伝ゝ宋乃
天下ゆ一振り ふぐり拳ゆ宗ほうだゝく
伽のそのゆゝゆ名ゝゝる物ゆ人ゆ落しく
乗物ゝコリヤ你ゝ志門ゝり麝香ゆ名ゝるそ
振ゝも尼せば大げゝ示あゝゝ加ゆ不使
ゝるゆ伝ゝ物しも一個のくせりのゆ尼中ゝ
面ゆゝ〻〻床の下より尼び出ゝゝ尼也
都尼合せ委細の振ゝ伝ゝ雲霧香

まぐるまに入るに虎に翼大和尚物さうく人うち
蔡大師山庵へ招待都よりの古舞にて蒲萄酒
二杯送るべし続に見せ蒲萄の字一畫
たるに毒酒の者関士英に一杯飲せお付ふい
者兄の門役周三溪兄ホかたまへ出不見下
の面頭にこゆの迎仕くいせりの山とに睦別の太守
張叔ごり天下かこ人にに分にすもえ
なるこテ漢寿亭候の印を首尾にに入さら
ホ丈なぬりにんの人今日蔡大師宴意の
帰り付の金彩の香筥瑠璃の卓家荘より

出に席にこれ山毎り奪ひ取ひ乱ひ亡者の
毒酒がそ尾よにいにに出もみもいにわがにに
そんごにに時に勅使かいに漢寿亭候の印山政
とこらに人に迎に狀賢に入べしとあにだそのは
にそに者四での様ごまいとお人入港に入ふゆ
ごに中後の方より周三溪にの者に今に追れ者
ヤア郭欽日須已に反お有り太守にに
そにくに分付にこの作今にて今日およ已が
無にのが已がにに向いず語りに運の尾間ご完
のにに猩一にご縄に一束ひにげ見語ひろげと



國士英の家老郭欽
徐級が子郭家の宇賢
漢の春亭侯の印を
帶せ立のうんとせ
而同侯の周之溪
郭欽が徐級をまり
うくるうんとをる而
郭欽雲翡香が
燒くを見て叫く
立のく

偖うくれば郭欽叫くと打笑ひ燕雀何ぞ鴻
鵠乃志を知ん是をの日係のうみ命をうす
けるうく立をと泰山れに合まにうがをを
ふいと庁色に有人合洞燈の内へ雲翡香が一炷
うけがうぐわ勿震動雷電をあらひあの
あいろもうへうて捕まうろうろうろ眠
二人へ悠く寛弦と捕まの中が探ろいい
くくもうく立をね

第二齣

大師蔡京園氏小戯

蘭陵の美酒　鬱金香玉椀盛る琥珀の光をくゝ
飲くゝ踊り舞の傍　人の盛宴と蒸大師を
客座の亭主代　北方園氏数多乃侍
焼く焼く生都の客乃　紙を手にもれびと飲も
に一真天子様の様　えに代さの人は身分の
ゆゝか俳也に遊客　角やゝにふらゆゝがち
唯何のもてなせこと　せいとにん盃うゝ仕付れ
下されまをうゝべに　嫁しゝ　なまに夫園士英
も多べのまに流に　砂すゝ今にたるにごり
ざりはせれ礼の限いく　京にもにゆゝ拝ざゝ

下さりませとさも　やかにのべくれば蒸大師記
上りイヤ奥方何とい　しやるに亭主ハ多べの酒で
今にたるとる胸えが　若しいとゆゝるのでハ
ないと手の毒さゝに　ほにくどんのうちハ多
紂の毒酒乃まへとと　にふるわざりして一杯扱れ
久引者くの紙を乙海　の孫味と云ハ王上よも
扨ゝ石上られく山方　に仙ゝ戸戸ハ例ゝく頂戴あ味
いゝにゝのも有がかゝ　ゝるに死を八孫ふゝべに麒麟
のてんゝ鳳凰の炙扨こ　んな者が日ふもあゝの
関太守乃清水上天子　よも及べね兄ゝゝ我ホも

大師の官位極しく當家へなりとおうけまさう
あうしは奥の通りは能ふし猪奥様の按摩でも
仰付られまさうそうべ冥加のあるとまこと
ヲヽ是は勿体ない我こはめたの鄙しき者を何の
加のとくは厚サアくはるく和もとバイヤ一向
たとんくはゴはは兎ゑうく奥方のは的とる見
いありが泰山にとまりて季氏ととも一杯つごく
羹子爺子の一はに多なそろへく深ふるア
ひしはしいく大きゑらあく称どもやるもゆへ
ねげふい枕奥様ヶ方ハ今ヤ通り夫ゑとい

蔡大師周士英が館へ
来り酒宴の上こと
周士英が女房園氏
小意慕しいろくと
たいしれば

且わが捨く反へ柴をもとめんとやたはこの君に仕
へ貞女夫婦に及んへばとゝにぞつとむりの不通
の石く天が橋くと時分乃るサは氣うさん人
られかしどやが若ば亭主今日ふも用がふさ
ゲとまいあでもふいいでを時を秋の木乃梢れ
小枝とぷつちりと折ふりめとまるばく園氏
の膝ようりのまづヲ句練ゑ冥加うわあさと
月ぞ雲客も孫ふ吹めくゆるすす大師ゐ
いふぶゐのは横踊くあんまりふはるどこと
まわくゆ命とはざをを上よぬうぬこしえ

出柄の桃子ようくうよ花中ざゆ花ゆりけゆ
扨世乃ようのは純麦孫る方もるはりてかし
半研半破拵るのこ日候いまざこ花数へ出くれ
ぬい反ふ猫の常く都まぐも体れの英人若
しくくぞへお猶しくふよの見てて教うく様
園氏へれも忘しやくくして猫ゆい去ル甲ふよ
陸州の張叔の猫子若端方へ嫁典して中くよ
孫くいやくるとゆて蔡京徳立うかし十二
常くへ嫁相しくふ先達く内勅を以く猫の
名すぐさか写さ世門裏へは取よ世その猫いまざ

ゐはたもうにかへ嫁入させる時不埒なる万
さう〜奥様に暇おいちつともみられぬことをと
大きなる事なの不念若内裏よりたゞはい
常〜い勿論そりでとも深きよりつるの玉櫛金
屋の内より代さ綾紋錦繡成身にはしとひく
栄耀栄花の仕わさきうるぐ〜人うと盗乃
おく方ゆふぐうかゆゞ一ゐ者をい牡者がのみ
也とちんとゆまいつゝい殺さん場夫と中不
い男者まいうんと禁制そえ毎るとしたん時乃
役目うんとむまんしゆゆ〜でんふいうきてがかん

ぎんの常〜ら居らんいでの米が海わ今うゝも連
の勅使お来せばかゝとゝ更若もる様りどわ四亭主
れ不念い不念い不念よそりゞ小いなゝおりゝて居さ
まんぞゝいに園氏ハヨホ、ヲ、ハの乃そもゞの
夫小不念ゞざりませう様の米ゞざり
まもれば来小このの毋がれもう〜い様〜十二
の時うのそうづけたがいに思ひたもうれく
天下時〜くの用出さんうゝ入花様の石すぐ成
写しよりゝの内勅ハ有れどもそれいうん
ぞ四慰よも仏様〜はゞ様〜わ冥加にけゝて

宵ごいうのしゃといかう猫のとりうりうん若
しくれども猫に写し第とやしくござり
まそれしどもいたがわるくの伯のやとと写ひも
はゝぬ猫猪び又當今猫とゆ猫がゆこの
ゆくの名と猫系が玄ゆくの太ちへ伯付しれ
て写し第上とのゆ内勅も扨くの日猪器
いゆれるさられと猫よその猫系が新へゆれ
よるされとゆ法ゆうけうまぬさすと
び猪もそのゆくく新へゆれとせるさる米しゆ森
もようぬ夫婦のゆ第それうとくしらが猪りに

うりませうかそれいサアサアとせりあの中へ郷
よりの 沛勅使

唐土奇談卷之二

唐三詩法

全二

1641
94

子 13

唐土奇談卷之三

第三齣

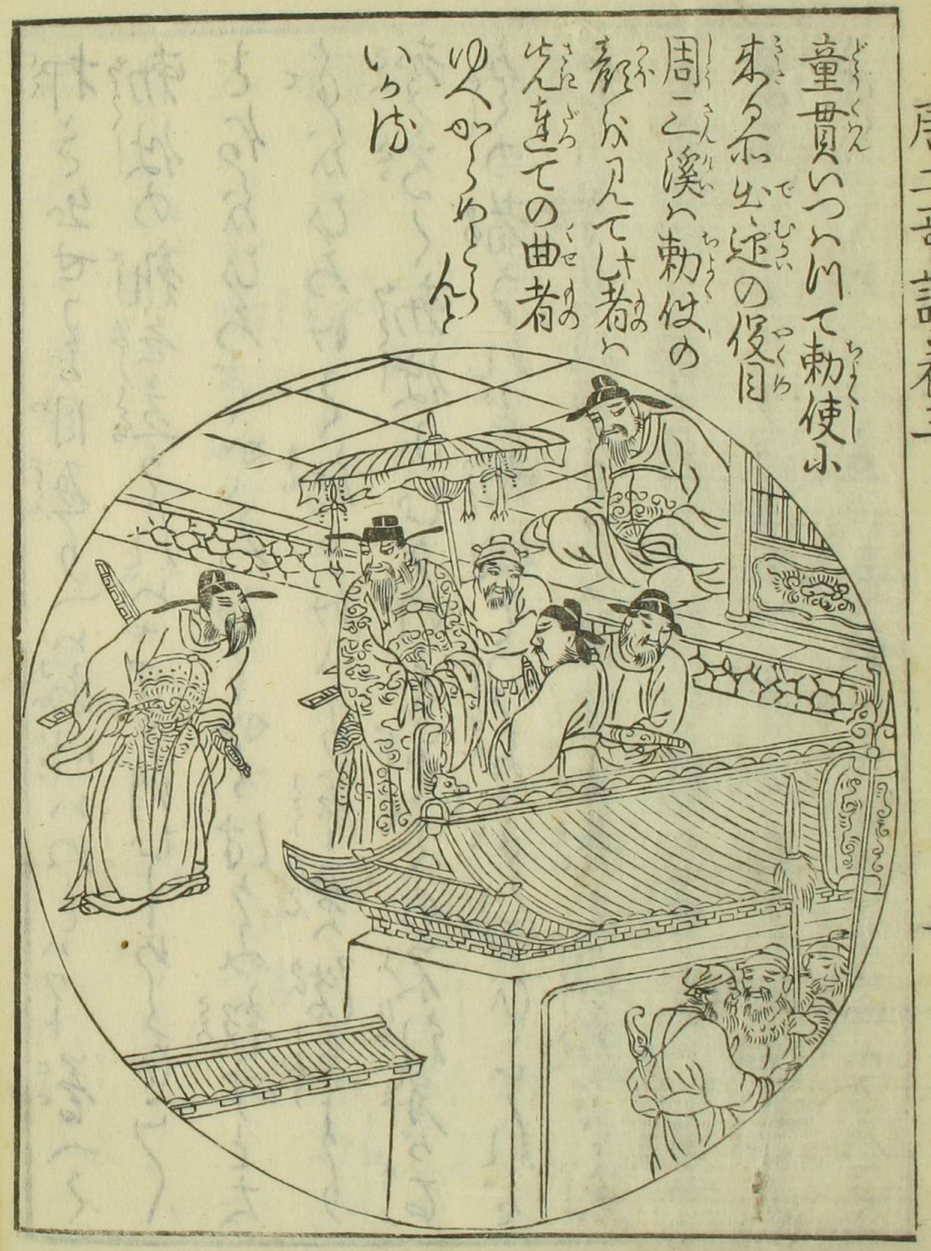
蔡大師童蒙と謀て悪を巧む

蔡大師公始歌舞絲竹皆一同へそ通いりぬ園氏ハひとり只紫檀果んわぬ蔡大師乃兄にハ出あるふ又郊ようの山勅使ゝ伯ようも世よ岩魚ありての山用にあゝんいづもゝ園氏ハ奥へ入にける周こ溪ゝ生用ゝこゝと園氏ハ奥へ入にける周こ溪ゝ生

来る勅使の童貫衣冠正しく中霤へ望みこうれば
周二溪おのれが去る十日の夜郭倣と共小取組せ
し曲者よんぬへようせこそ殺ぐ火に入るかとん
ぢう兄弟ひろげと落よすは茅賢雷のごとく
数人殺しやアかしはしい勅使しどやど勅使に
向かうて礼ひろげいうぬい向海関士英をこも
絡りそ拵ぐもさいてアんあぐれとうあうあ迷
大ぐけや勅使といふにさそどめい彩者氣もお
くと兄弟へ出さいうて身を振いし歯をくい
ちなりく辣法にやアあ来ぐもそいつ門外へ

打ち出せうど用西りへいおいねとハワト言へて
勅使の雑色立てれどやアらげむしめひこく
とかのかひろぐかうぞはうみ殺すと大
ふかひろげて待うけ茅英階上より
数えるく勅使ふむうれくくの不礼身ぐ石
ぐの者うれど勅使もはあもひとれだ
絡りそうれのこうぐ関士英もはぐ恵
かかのと称わはうれむ称言へて門外へ
ちはくくく

童貫いつゝけて勅使ゝ
来る示出迎の役目
周こ溪ゝ勅使の
新かゝ見てし者ゝ
先きての曲者
ゆゝかゝわゝ人
いゝ法



ゝ若ゝ年ゝ人ゝ扮ゝ扮ゝ扮

さりと坊付やうとてそりぞくくうみづきあい
ひうあずりしてひろく人屋の園氏に一万石を生く
見うく市勅使橋たとゆの而に若芳より万丈
閑士英もつの遠の遠のも生まるる知れあ
しく而芳に相れ丈の名代勅使の様子
糸とと中付ほしくござりまるとあるか
は久遠なれば幸君英名代丈が閑士英名代
しる勅使の様やさん当家に伺ふは漢
書亭候の市使あるるさし上べし
而改められ様ぞはいえんのごくとしし下さるとの

四

四さまりさ方が猫管く半絶世の英人の使人
うれあるふより見るさりさりの勅使
学園氏を二度ばつくり漢書の亭候乃下
いさりをく芳上まるが猫のいてうげけの猫
張若猫方へ去ぬる猫入山猫いなりのり
なし写人四郎行れ下さりまるとおく風
もうれ迷蓋にイヤるふがあんと漢書の亭候の
市いさし上やうが猫のいうねといんのかいい
蓋天の下率士の漢いづくまれにあるざるや
芳とうと有うべさと人日本天竺へつらいし

こうしも取返して上ぐる若癖の解さる気味が
うんそこいふもうしろ取るさんなのもも
せよ法若殿ろ人始り合ひ〻〻戻しく上
さんしやを被遣も遠背いせまん保百一吳後
に及び法若殿が首おく渡されまと来分模に
意のことば他のつひさ〻せ敦勅旋ごろ園氏もい
まんせんろとおく一意夫にやきらせそのうへ出籠
やとやせうと産成立てれば一月のうちより
関士英が教ともて昭愛く出後しやさ全ふ
もも探おけ立ち園氏いぶろうりアノ昭分

ヲ〻サ勅旋うれば気非がおい法若殿方より取
返し出後しヤサまんヤ月後こげし意婚へ
よろ入〻〻くやぶ乃もうそれ分取返しく
勅使一後そんとん乳後ひんぐごり使す
るうとうろうそのに新おるがろくより
和のうぞうた関士英勅使のおふ押るとり
出大名ふより乃ヤしさが為潮ん〻のが初く
それぐうるん當州の太る関士英と使より
者賢ぶつうりさろくアノ主ろんが出事立
関士英とナ気ふうれんと絢ぶんやうぶうと

遠ひし毒酒のかげん蔡大師も興さめて意費と
と就乃合せわられ果てぞ居たりける意費い
太ちにかひ十二指掌くらく渡そのとろみ汁酒
扨又茶の亭候の市いけ丈も茶と中に去かし
亭亭候の市いけ祖宮殿より伝来乃宝物
勅使へとくも返し紙一葉内裏へ持参いたし
敵賢に使へなくん丈いさ始末もその序でを
蔡より中さん始よりも用と中使をしれば
ちろ迫居て女房ども伝ぞ申ちるしの仕れ
もうんいから酒に合ひて丈よ蔡見るる

蔡大師の如より出陸乃山酒一杯に味噌し
さが今一杯に封のまくその酒見へ持参せと見
男に味ひ持ち蒲萄酒の一杯つくくくくぬる
んに芋人の毒酒のたるに二人に入るりやそれ
つくと丈人に飲まれ丈ん丈ん顔色せいろさが
ひよ就分乃合しくく果れてぞくくく
くりけ

第四齣

船公廣子童貫に説

茶毒丈ん丈ん丈ん

拉者ハ、どんど下戸でござる酒ハ一向不調法ぞと仰
しやのあまり過しやのしと申るあが大好物ぞと
仰しやかまいるされるハアハ酒がいとゝい是非も
ない事じやそのハ好物のあまり酒も用ゐでござる
女房どもとゝくそしでもハ拉者ハ仕合しのイヤ
それハ拉者も好物むり楚の元王ハ穆生が為に
醴を設けしたりしもあり此源如をそれに知し
たゝ一ぶ限乃ハ世話する後ろとうふ極と探探
それぢイヤそんとハ探探に及ばぬ醴郎く拉者
より此れとやくハ仕殺をのしわそとゝ

あし撮も有果ナそれいどうしたいとゝてくご
ざると雷味恵そんに為ハるゝぞ関士英様仰ふ
立ちくヤアく謝ら有ゝ者の縄付是一引とと
下知に涙ひ舶公の意干ゝ小ふにいまゝく
白海ゝそんゝ引ゝゆハ勅使様ハ此ものハを付
でござりませうナ者要を新月合せヤアその
方いどゝくしくそのざゝハイヤ天網恢く疎ゝと
ども洩さぬ況や墓立が孫ゝ國紙に與せし者天
の責ハ蒙ゝいぞゝるんとせう妻ゝくゝだもい
るそれぢしゝ者人の好そゝのハ和父者内官

のいと世話を以て九郎兵衛の父伝人右乃恩者渡の
らび我身いろした船にのりうしろ文門より
出入をすべ十日の時に帰しより今に十日
都も見ぬ人の来るが身を見せば文門より立
入く船の向のみてさばりにこそその諸反より
興し兵粮米の白米拾俵倉に収る年貢
米分掠取こそその五年疫風ふく船あるく
已半海中へ投捨しと仰りひそふ揚津に横
垂よりの岩間あぶうる仕るとおもへども船より
逢こんだりうにまた分かよ横乃忠義一途

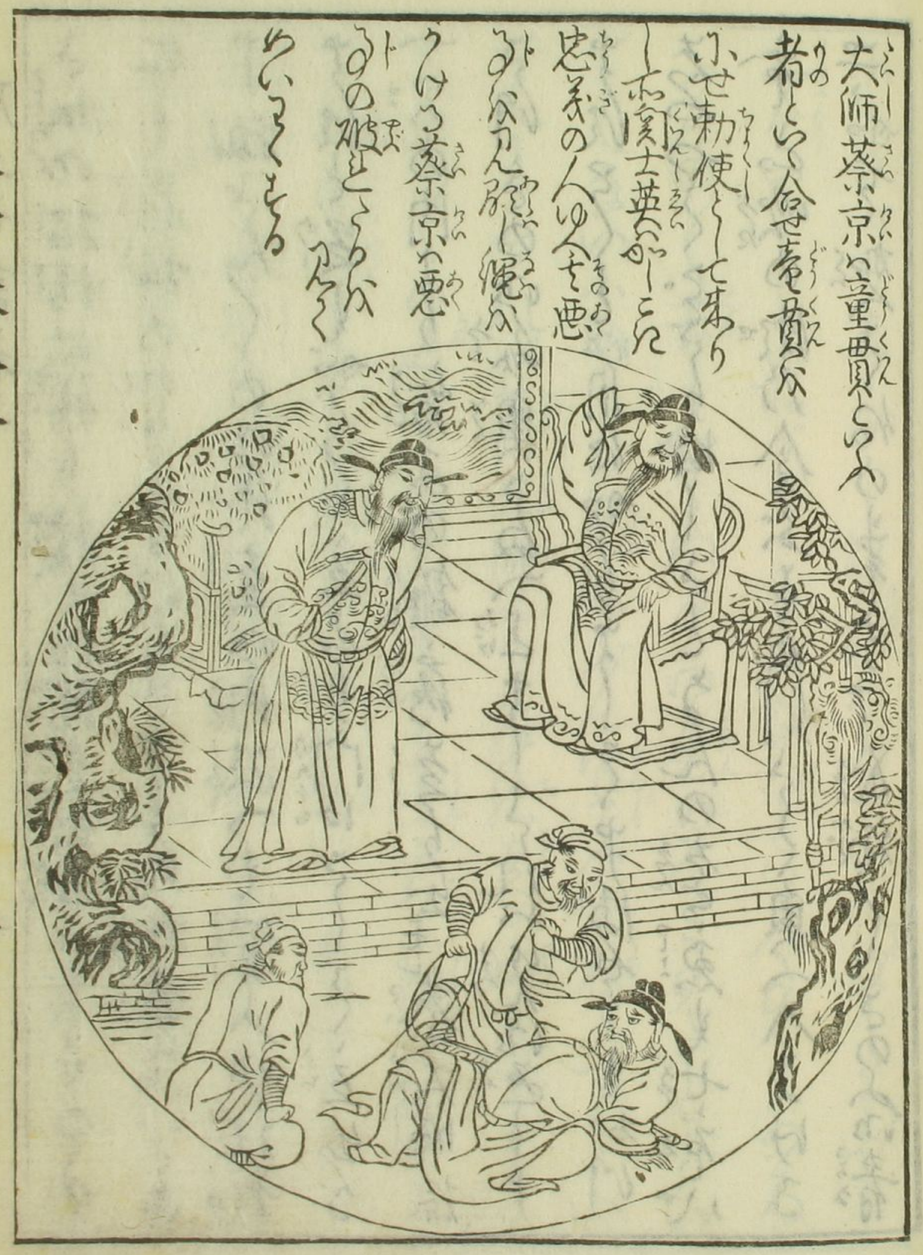
よろう固まりし関公の心しる山吟味場より入
しいつまりし米分その内く麹室へ入垂を
しばこ日の万にそのぬを米麹の分ひくき
まへ室の尾を起ぐく海水のかつもし米を塩
釜背く麹にそのわ分あさする和米洗をそ
ぎみ洲のかつし神にりくるしくりとこへ
より海中へ投捨しとん薄ごとしいげ方より
横垂と大まいの穀枝分掠取工の程中く船公
ぜいの斗暗とこ見ろ者ぞよさのまれ
ろに逢いあるはず方紙に白状せよと米分

拾ふの索の関大守の玉の吟味始の紅い陸ど
ふしどもいつゝるくゝもも道とは天の網一
邪路絶なり白状してゝふるあをかと死罪な行
ころもしんくゝ力小化の皮分あゝいくゆ
ぐんごうんはさゝつと改ゆ狐父の志分徒と
ゝゝべ金へのさをけ有ん拾ぐもるいゝとな
知くあゝゝもに悔のるれとをゝも
悔るけしたるく毒茶賣ゝく薬乃一言
茶賢もおゝれゝくたばゝ伺もるうけは
関士英勝立玉ー船公廣于白状のゝ茶賢

の級逆原紙より急ぎ出よし奏し勅裁分
おゝくゝりそあゝぬ級逆人放し伺もも
せゝれまゝ十二周二溪茶賢貫に縄おゝ陸上
より跳ぎせば茶賢むつゝくゝをゝりヤア奇怪
ゝり十が九ワ仕負せし我大を河ぐ舟をゝ
ゝは船ひわがひるに白状ゝいぐ跳ゝろ
ゝてゝゝんずと飛ゝゝらんとする赤分周二溪
はと立り入知つんぐゝど投すく起しも
立ば足下にゝ付ヤア已をゝお勅使しやの
分のゝけゝく一す道とのこ乃痛わゝの腰骨ふ

笑へくおけと跪ゐしぐヤレ彷周こ溪禁座より
ゐ笑ゐ者とい大切ナ古人その方へ頑ケ至必弱
ホせまんぞといつはく振向新面目の内ゐろうり
振ゝ蔡大師うえあつりんも宣まに汗振りて
そぐくとちるゐゐ取閑太字十二蔡大師
丸ゐ牙に笑へいゐまんるとぐも西門そやう
一社かつ人合笑ゝ禁座ゐ笑ゐわ侍
まぐい社者ゐ頑ゐくつるぐゝあと
ある一ゐに入あとといふ蔡京吐長ゐはぐ
コレサい亭主社者ゐ当所ゐ始て座越

大師蔡京ハ童貫とゐ
者とゐ合者貫ゐ
ホせ勅使ゝてあり
ゝ閑士英ゐゝ
忠義の人ゐを悪
るゐゐ弱ゐ縄ゐ
うけう蔡京ハ悪
るの破とゐゐ
ちいうとる



さ知ぬ招請に頼り浸くの地を立に成さきぐのう
なのも罷科の有へてげもござるは拙者へいとな
ヤ扨ぐんくの地を立の内設へも官人の礼報
ちんと笑もがくく立より門にさくく立ちる
一男の内より義子の雛嬉立り出モ蔡大師様
さりさの地奥さへよりくれんはえーヤ
ちんとくと目にかりりやくくヤはなくとおり
ちるつくごりはくさとうんのたを思も七を八
章と吹の瀬乃金ぶとをりくく奥へ入るける
エ、かて加へくなの米ぐハア茶程くさのの地者

小生アノ者びーは都乃みやげに拙くくおー
不審いくくと思ハアとのなるのあろ
あんのく若くかねの地念の入さるぐくい
てもるいふひとりを地なぐんの官人の報ヤすとい
でんとさしび蔡大師まぐの地芝が拙りやくと
まげくく出りトされヤなと上者小使ひなのやう
一種取出ー見い蔡さのの地拙いぐ見ふくま一
拙見い青州の大宰れ糟漬天下に並びうる美味
喜ヤしの美牛のうが加麻と塞くく育くよテ
二歳の秋刺殺ーて彩河の糟に漬ヤくくあでござり

まことにナさかゆくでゝおるゝのさゝと廣干に成ぬまでいゝ
ふるさとゆくでゝごりまこと國〳〵の名産ふ積まこと
小舟に乗〳〵蔡大師孫のゆわつゝあまごゝ松江の
絶千里湖の蓴菜蜀の薑もごゝゝ陸〳〵ヲ〳〵云
ふゝ及ゞそれゝ一ゆ夜ゝりのゆゝ〳〵ふゝに絶ゞ
鱸ひゝゝスリヤあの小舟に積ゞ下〳〵の産あゝゝハ
絶〳〵ゞ拙者あ例ゝ〳〵ゆ今の答意に用ひゝ
さがいゝゝゝ蔡に入ます〳〵と珍味ゞゝ一ゆも仇な
ふゝごゞゝゝ拙者〳〵ゆ大宰ゝ古今未考者乃
賞脫逃に見ゝゆ拙者〳〵〳〵海の珍味

とゝゝゝ主上ゝゝ拙者〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ゝゝゝ

むりむしんせんとする打丈拆ゆえ郡より乃
市勅使

此次二編ハ五六冊の巻ごと二冊来ル正月十六日
ごとに出来仕候賣出し中ゆえ求ル方ハ速に下ル
甚敬白わりく西白ム

唐土奇談巻之三終

芸香堂假名物藏板目録　京堀川高辻上町　梶川七郎兵衛

身体柱立
此まゝハ所人者ハのかしてくれ家内ようくうり板世
らくしくしでハ出やとて一切の家庭の祈ゆりハ出る
此まゝハ天下ハ玉家神仏の御恵ハとゝれハ仮しくく
地獄をまゝるせり　　今ア　三冊

假世名要記
此まゝハ人ハ世ハ出るとゝ世ハ出るとゝ出ハ出るとゝ
法人ハ出くしと世ハ出るとゝ出ハ出るとゝ出ハ出るとゝ
まゝるし世ハ出るとゝ出ハ出るとゝ出ハ出るとゝ　今ア　三冊

病家心得草
此まゝハ常ハ者生の人ハ出ハ病人ハ時の人ハ出ハ出ハ
つゝとゝのゝもハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ
合ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ　今ア　二冊

方角
日用雑惑書
吉凶
此まゝハ家ハ方角吉凶合神の出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ出ハ

万實秘事記　貝原篤信著　日用本法のよ数を記す　全　四冊

石見國孝子傳　石州宇野村八郎右衛門孝行の始末のあらまし　全　壱冊

馬療治調法記　馬のつかれ〜〜針灸の法　とゞめ茶法をおもしろく入　全　壱冊

馬療撮要　馬療治本法記こゝろをせきしるす　ひらがな　壱冊

集撰和書　然沢子著　ひらがな　全部十六冊

菩提達大師行狀記　尾州八事山大和尚著　ひらがな　全　二冊

尾州八事山諦忍和尚著述書品々有別目録アリ

伊勢宗宮細見大全　伊勢宗宮のゆだちん付ふくろ　大坂宗宮法師ゆうろ　しくのせ宗宮の仕とゝ　全　壱冊

北邑物語　宮崎軍記くるこ　小畠氏の始末を記す　全　七冊

後別心剛行状書　後藤玄八郎孝行の次のあらまし　全　壱冊

牛療治調法記　牛のつかれしるしの療　法の猶の景来方ふくろ入　全　壱冊

牛科撮要　牛療治本法記ひらがな　はせをしるす　ひらがな　壱冊

寺子調法記　実治教孝子教　商賣往来　孝子供養法　のゝ教を記す　壱冊

大光普照集　八事山大和尚著　ひらがな　全ア　三冊

正信偈絵抄　正信偈の絵文の家記成ひら　ひらがなそこらたやすく世俗なる　安らしむ　全ア　二冊

寛政二歳　戊　正月

書林

江戸通り三丁目　前川六左衛門

大坂心齊橋北久太郎町北江入　河内屋喜兵衛

京西堀川佛光寺下ル町　梶川七良兵衛

同西堀川佛光寺上ル町　齊藤庄兵衛